孫會見錄志

初編

拾二

へ 遠13
2475
13

へ函13
2475
13

藻會見雲志前編巻拾三

同源

一　時致五郎義経の源氏の事

一　鬼王道三郎吉彌の事

一　時致由井ヶ濱にて死刑の事

茶磯蒙

謙信公見雪志前編巻拾之

附致品之夜話の巻

富士の猟初事清水より駿府九日屋の
別荘まで清水宿より附役をやり
出さしむる指図の次第を写とて
中幕二間ぶりあけらるべき人々
十時半右衛門北条氏康の

さぶらひ利上総介義茂
を義茂追討の為に小四郎時宗冠者
義如を遣はし前司義元を浦賀義氏
殿と武蔵守重忠を相模義村
連下河辺弥四郎行平を稲毛三郎重成
新田四郎忠常を朝夷奈三郎義秀
宮内少輔長綱を沼田三郎宗綱
相政を遣はし出羽の大夫尉

迎将軍を鎌倉へ結城七郎朝光を人々
相模国住人和田義盛を三浦介
為人を中央へ作り物語を家義
利平義氏を忠氏
執奏の後を以て時頼大江広元実政
関人為秋を前司時政と
出る利平を利平と
乱を為利平義氏

忠氏朝臣もうしてゆきの場を推
奉りて祐経方へ夜討入あまたの
人々と同じ剣さへ所切迫て相
籍をとりしかの事西行あのうの事
うたを申て門をとづと時致
番文をるよりの事服をといらひ右衛門と
をかしく眺て祐経入道減涙ハ
四郎殿と為うるの孫沈涙をるる

服迫をのるさいとも完朝の事
を申よるみ涙をとりの沈ふべきう也
言上をと逆ゑ事ってふ〜迷きゆ事とる
らてみ時ゆりる將軍をを高名を感
じのゆ四郎をを西あまとぶ也〜吹ゆる
べとてをを問ゆ時段ゆりを祐
経を討ゆ時ハ父ゆ扇の板厚をとを
ゆんと祐経九歳時致七歳の時ゆ事

ちまきりは今年稚者のたんぜんをさしたき
く行付を高く来りしが時なりて
芋粥車をとて進しかたちをとて
牛朝の吹しに法師ふ鼓うちて殺
るをとりうるまきりは去程ぐ者
朝の侍を行由多く切りや時殺りけ
る多くり来れ唯二人出所迄推
年稚の者はりしを来りしが出夢

ホ定りて池付はんへ鼓ぐ郎ぐ
法師と付神ふ来事者の品を通
しの心ふ孫る来獅りの好はとぶ出郎人
ホ上出合いまぎりり前と浜さんな
ぶる知歌ハ行間はあるたしと尋らも
はの通ちまりりとを言へしみを愛よ
敬ちき迎来ふ来の若りり時多出ん
面時とのりし者知ちる大切の場ちを

郎殿を叱りひ実を糺さんとせば
が腰のうさみ教訓の為一大事
切るまうぐ申てをいまさみ溜り向ふ疝
ハ中ゝ申して大方ハ後疝ていんよ
くゝ出吟味やさるべしとの為遊事
ちうぶ出所を切申ゝ給ふで郎まへ
をとゝ伝ぎゝ推と申ゝ年軽朝よ富
こゝたりゝの手ら時致が向くゝ溜み

きうもたぐゝ出ゝ父が御ゝ出むくゝ
ざるゝ出ゝ八命ゝ申ゝ
くゝ時ゝ既ゝ疝ゝ祝ゝ詰ゝ
時ゝ出ゝ者の出ゝ和ゝ推ゝ年ゝ通
陽ゝ通ゝ祝ゝ伝ゝ出ゝ敬ゝ対ゝ
くゝあゝ出ゝ陽ゝ強ゝ祝ゝ滅ゝ亡
の時ゝ高ゝ好ゝ捨ゝ敬ゝ代ゝ続ゝの
西ゝ出ゝ皆ゝ言ゝ出ゝ孫ゝ

史今家の中に居まもる所の宿をと
云よりて出家をと猟師自害せんと猟
けるを山の中より若き人を心ゆき
推参せしつゝ山賊つゝ海ぶも
のふ道行のかゝ捕らしかり海を
夢の中に思ふ遠ふ今史の中猟
をやべきや軽朝の使もるを大臣ハ
何道をようけしぞ問後ぶるをさしぞ

彼をの宿云とてふるく猟師ぶ方ふ
ゝまもく討入のとき記もるく人を言ん
と彼せて加勢討の場げをてハ河開く
とそんぶ討捨ぶも思ふ彼のいく
り出彼ふ家ふ罪名免許をと乗り
車頭安堵仏有ぶ悦んぶ車図
下向をべきを猟師ぶ待遇をとん
途中より彼所よりゆるく行るを

品川の紙屋出合のごとく落合
いろはの手紙は京まとうる舟の果
まてのと云ことは新町の吹やり
そびけらまと大尾国ゞ部屋みちあるくゝ
子孫は作有ゝ西明元のごとく場うり
しかは品川致ゞ云ことうる西町りもし
そうの紙と云ことて結構と一所よ唐
恵ゝまとのゝゝいろ一回鴻門の帳

ゆうりしの遅滞して教ゝれるゝ加
子孫遅敬うもとうるべきは時後
第手ゝまとゝも結構遅ゝとき
まゝ西取之の有ゝは遅滞とつもは
てゝもゝ手人ゝと家ゞうるとゝ和
相手ゝゝうゝ寄ゝのゝ遅ゝり家毎
ありと吹ゝゞ家は来りて敬を対は
告知ゝりとよて云ありうるは時後

ときは武士の御もとに見へて
御君の御怪悩の情を推察申所
を強ても御罪人を訪んと
するは大罪のゆゑ度々べきうその
罪を犯して死を覚悟の事なれ
母は初めてべきや事なれまでも
子をおもふ生るものの情ひとしなみや
人間の母乃うへ孩子と情

也事は父の縁をたどりて頼る事なく
是迄初めて父よ逢まと母の身迄よ
為人に成る子ゆゑ死する事を
豈知も知きと出たよんもん法は
孝ありしと称する面目完明の書かき
遂りしのこと有て君を始め
列座の諸士是を聞き感涙を流ふ
一宮様も独りと涙を新朝

公宗卿納のひとり方と云いぶ
みんべ此方いひある中絶て西行
ゆくえしらずなりぬ時後鳥羽
そのゝち父の遺跡帰ふんと
出家をゝもくしこの事ゆゑ歌と
詩文をこゝ世間今を背き世の言葉
ま遠ひ自ら信西やうに男とうり
ゆ面ゆゑ世をゝもくと若しる事絶る

求ゆゆ安ふ抑ふ去ある速久元
年君の出ゝ治の御世猶を弥ふ
ゆさんゆゆ出ゆゝとゝ去ある池ゝり
ゝも思り多年あふざりゝゝもの
京都ゆゝ方の力をおゝ抜ゝのゝと
ゆゝゝ世世世世世世世世世世
ゆゝりの御ゝ明自ゆゝ世事
ゆ抜ゝゝ遠せゝ此月八蒙賞ゝ

べきよりの事源氏の宇宙大切
号源ろろ足利先祖為仲朝臣
じりて二振の太刀をとり
勝丸とて代々の宝とする
因源氏おしたがへ
延喜御宇の代より髮切
吉散とかへ
元亀の乱出来
く虎海七郎
を動ありし
ちとしへ
あ
鎌倉別当
名付
あまこ
一年綱七年
く虎海七郎
を動ありし
ちとしへ
あ
鎌倉別当
名付
あまこ
一年綱七年

生ずいたのちく二猿を飼へる事
もなんと明家はけ事をおのれとおもひ
一回神宮と称り和泉国より
出さるる猿の猿いらづして今日まで打
捨つるがたうふ御を新入事例
ち時彼ら猿の別当仕実
八郎石猿ふりてたる度ごとに多くの褒
国家のおりふし芸猿をもこのくさり

名る城忠とも猿ども称りと登也
べきものなれども心易思ふ事と
宮のかり出時彼を君乃明家歳
じと云と称り有猿を沖をかげ
東ゆり将軍家びの宮ゆ十所
御ぶきハ沖と一所ゆ所致
さんの兄弟一所よ死なんと約しゆ
くるまきまぎれ御為ゆ覚て兄が討る

ふとも好じゃうに定うく清兼ゆい
んと好ぞまとびつるく迫つきゃ多ゑと
ゃゆびく將軍江海市ゆ知るてゆび
忠常十郎ら首を拾ふ時
彼一国んく尚服をとらびつく新び
ゆふべゆとゃく再び云ふまちつ
せびたりり完和ゆうるびくの紙
四ゆ時彼一点の滑りゆく速ゆ言下

狩ゆ軍勢大ゆ助ゆ
実政ゆ彼ゆ面まとるる時彼ゆ矢
なる男さるゆしら四郎特をるゆら四
郎人ゆ名ゆ名さるべきと四郎定宥ら
ることゆ彼ゆ特達ら將大庭九郎彼を
中場ゆんとまりゆ結ゆより西
俊ゆ命をべき時彼ゆ大庭九ら
新ひ自屯場ゆるべとの来て時

致方なく掘兼て三尺間と定て今
日言上のあるべきやうなきやうに
ハ存じ候へとも死罪をゆるされ
給はるべきの度祐経が押参の欲
き侍へ中ゆうそ侍りけるに彼者ど
ハ人くまさくしく父の継ぎとなりて
殿中の警固をつとめ出仕とて
侍ぞ大庭ゆゝ面ゝ参ぬ

祐親法師が某男子の子孫断絶せ
ん事本意なく思ひ給へ侍ぬ
されども時政たしかに取り有給き
よしを聞ものの同じ所にて
かゝる法者ども〳〵なりざるを猶
ゆるされぬ兄弟死をもせんと絶えく
法りの中ぞ今更命をおしむ
又祐親が子孫法師

多田満仲を神仏に願こめ
もと好む道なれば好分り
好うふてと思さ中さん事も
ゆゑに行間もなく死をのがれ
はう〳〵の体にて宮ゐる程さ
らぐ時彼を大内殿さし遣せ
し命ぜられ刑をも同中の刑しゆ
秘密所時彼を松ヶ浦ヶ
浦ヶ引もされ給ひ

摂一族おかの所より時彼と岩間を
引ぬき筑紫忠ちとしかの分にて
方彼をもち始ろ忠りく時彼振迫
り勇士の前きるく大事のあぞ独切
ゆあ〳〵切ばかりもちまち悪霊とな
て決ず命を元ぞと服をいぶかもう
ば忠を世ゆもかて仏〳〵思ひず刑刑
うひると居ひ〳〵切るゆ方ぞ

定まり侍りさんぬ切抑ぶるうち時
波抑ぶもきこえざる中に波はへぶるに
自服らしいよ〳〵思まと抑ぶ二の太刀と
ちりぬ〳〵中り〳〵首を討ぶる後
宗胡の一命をかりぬ〳〵と霊と彩と
次第に御一患ぶ抑ぶ病心のおそ病さ
の迷ひ迷ひ迷ひと病ぶ抑ぶ資難して数日
ぶるひ抑ぶ〳〵ぶ二十日抑ぶざる間つね

死ぶ〳〵ぶ名思の家ぶ抑ぶ読み問ぶ
法也一内云ぶ一ぶ〳〵ぶ軍朝ぶいまさぶ
出精ぶ及ぶ也ぶ抑ぶ〳〵ぶ東ぶ高弾ぶ
迷云と迷ぶ〳〵ぶ毎ぶ出資ぶあり
ぶき事ぶ抑ぶと宗ぶ東の出ぶ父ぶ抑ぶ
所法法ぶ抑ぶ仲の毎ぶ〳〵ぶ抑ぶ
ぶべき名命ぶ抑ぶ抑ぶ抑ぶ抑ぶ問
ぶ抑ぶ抑ぶ抑ぶ抑ぶ也ぶ抑ぶ妻の

もとへ中道をとり

鬼ヶ道三所古墳の事

鬼ヶ道三所の者人八月八日の夜白人
見事みつとうし見飛行古墳へ向る
沿道捕獲をとるを始の方を助て見る
て富士野の旅館に火の光
り冷まじく見へる由(相)を見事おり
ひけり由(強)をとるものなしとそ

本ことをとげさせもうす心をもとおく
おのれ下ば世をもやし貴人途中の者
して事ど居る市ヶ所を明さもれ
捜候と見へしき男毎りる道三所神
を知へ富士野の方にあり火の
りる見へ(ゆく)行事申ると申ず
彼男如程の事へとり申候
芳清牧乃出張館に居申候前

往成国は前世に釈の教ふり
とうとう菩提を討ん所人あ
まくみ身をとゞめ也所中と強勢さ
せりうゞナ前ハ我のうちゝ討ると立前ハ
暁言ゝ中ゝ痛ゝて法ゝ者ゝ
の働ゝき大物の西ゝ代ゝ
来ゝ乃ゝ中ゝ
く鬼ゝ道ゝ言ゝ

じゝゝ
しゝゝ
ゝゝ
く
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

角りしごうの妻を見たりしが後
ゝ[illegible]まを見てふかく歎ふしたがく
て[illegible]歎きるを聞くの女ども通て前
鬼まと[illegible]もいふくとりかあり
此歎きたどりりるかしがも来るまも歎
きとも老がふ定のるひとて死をま
ぬるとのるとかいが元とけ武さと命
と知らんじ名を宇んじゆとを思る時

兄弟の此事ハ父君の歎を訪る事
程者ふの名を百天ゆげるふ事
ゆまとび此ふ後ひしびるとべき第之あるに
狂病の名をとをわ果まふ沈海乃
中ゆ[illegible]ゝ病死を志のべ本市を
思ひ名ふや歎く者人ゝ始のよう
仕人士をとそんじゝ彼ふ心をとをあま
りまゝ此完明の場所ゆて出仕也

つゞき事をヨみてのゝ御せ道明寿
死の山用ことゝるゝどゝ兄弟ゝ別まを
りゆ年海ゝ布ことゝゝげられ功名と
事代よゝ一ゝ人事と新ひゝ面宮ど
の山海ゝ食ま所の山ゝ多ゝと海ゝ
今更死をべきゆもゝゝ世ゝゝ
と山路吊ゝひまゝる出部道世の
志ざしゆゝ山路をゝるべゝと記

金の弔をそれゝ海ゝ亦人打
つまこゝ産ゝよゝもゝ出部をゝげ
兄弟ゝ言提を吊ゝひゝゝ哀れ
ゝ母と二人ゝ海ゝ産ゝふゝる
げきを止ゝゝゝゝ知ゝと知ゝ
ゝゝゝ新をゝ兄ゝ亦ゝ
山前ハ三年の間ゝうゝゝぶ
りゝて唯一度ゝ世の別を

ゑり深あらいとまことなる面うち
ゆく波をとゝるまゝ今ゆくひ
合をるくまゝゝも時後の動きとの
ゝもゝ今での恨びゆくとゝ迎
海の如くゝ深ゝ慈悲のぎりゆ
きゆくゆく支流より將軍の上
云ゆくゝる兄弟ゝ迎りし弟を生涯
面ゝとゝ誘ゝる弟やけふゝを

ゝ出ゝゝ迎ゝまで出ゝゝゝゝゝゝゝゝ
と葉ゝゆゝゝ見ゆゝゝ浦ゝ海
ゝる面いゝまゝ富士の物語ゆゝ
しゝゝ流大友ゝ迎ゝ紙ゝ
式毎ゝ見ゝゝゝゝゝ物語ゝゝゝ
見ゝゝゝ初ゝゝゝゝ被
歌ゝ流ゝゝ姫ゝ心ゝゝゝ
美ゝゝゝ毎ゝゝゝゝ沢家朝の

是非ともに妻子ども妻子ども
ゆるさるべきあり
ゆるさるべきその心底を
聞くさもなければ出家
法師ゆゑ是をとゝんもゆゑ
感激もり時は法師ゆゑ出家
をゆるさまと一向日は変死の事の
是をなれば時は一向専の者道乃死
をゆるさまと思ひ出家
も思さもなれば出家遂げるべ
しとて六月四日より富士の麓を
出家なり法名を海全と
称り出家のうへ富士の
見へるを今還俗
歌人の事をつけ悲涙を催ふさるる
ものの哀なる
涙は是の記者
為の教を感心せ

もる面(おもて)より狐(きつね)の所中(しょちゅう)を流(ながし)もし
獨(どく)籠(ろう)を喜(よろこ)ばしめる罪(つみ)あまたび祝(しゅく)そ
の智(ち)を有(ゆう)べきうしとおもひ狐(きつね)
怖(ふ)せしうばら出(いで)仏(ほとけ)をそでみ酒
白(しろ)の冠(かんむり)を色(いろ)もうしは面(おもて)
狐(きつね)と言(いう)れ汝(なんぢ)帰(かへり)見(みる)波
塔(とう)をとふひ狐(きつね)
出(いで)るあのうあまたの者(もの)乃

事(こと)貢(こう)を免(めん)ず吊(とむらひ)料(りょう)のよ
仰(おほせ)渡(わたし)しうば狐(きつね)ばうまき事(こと)
晒(さらし)の激(げき)始(はじめ)て安(やす)流(ながし)のうひを
よそ出(いで)ぬ出(いで)ぬ出(いで)ぬ中(なか)ばの
しび勇(ゆう)を奮(ふるう)帰(かへり)とそ
将軍(しょうぐん)の士(し)と出(いで)ぬ仁(じん)の狐(きつね)
狐(きつね)ばかりなり
謙(けん)斎(さい)見聞志(みもんし)編巻拾三終